

訳者解説

慎改康之

『〈知への意志〉講義』

(筑摩書房、2014年) 所収

これはMicrosoftWordによって作成した原稿をpdf形式に変換したものです。

『〈知への意志〉講義』に収録されているテキストと若干異なる部分があります。

訳者解説

本書『〈知への意志〉講義 コレージュ・ド・フランス講義一九七〇—一九七一年度 付「オイディプスの知」』は、Michel Foucault, *Leçons sur la volonté de savoir. Cours au Collège de France (1970-1971), suivi de Le savoir d'Œdipe*, Paris, Seuil/Gallimard, 2011 の全訳である。

一九六九年、ミシェル・フーコーは、「思考諸体系の歴史」という名で新設された講座の担当者として、コレージュ・ド・フランス教授に選出される。そしてその翌年一九七〇年の十二月より、「知への意志」と題された講義を開始。したがって本書は、彼の記念すべき初年度の講義の記録である。もっとも、正確に言えばこれは、『ミシェル・フーコー講義集成』としてこれまでに刊行された巻とは異なり、実際に行われた講義を文字に起こしたものではない。「講義の位置づけ」でダニエル・ドゥフェールが語っているとおり、この年の講義に関しては録音が残されていないため、本書は、ときに講義内容の部分的筆写や聴講者のノートに助けを求めながらも、基本的にはフーコーが授業準備のために作成した草稿をもとに打ち立てられたのである。

この年の講義は、「知への意志」をめぐる二つの哲学的モデル、すなわち、認識を普遍的かつ自然的な欲望の対象とみなすアリストテレスと、認識をそれに先行する利害関心の単なる道具とみなすニーチェという、真っ向から対立する二つのモデルの突き合わせから始まる。そしてそこからフーコーは、活用すべきモデルとして後者を選択しつつ、アルカイック期ギリシアへと時代を遡る。彼は、ある種の知の要請およびある種の真理の希求がさまざまな利害関心の対決のなかで出現するプロセスを、前七世紀から前五世紀にかけての司法実践の変化のなかに標定しようとするのである。

若干の欠落が見られるとはいえ、フーコーによって丹念に準備され、編者ドゥフェールによってここに再現された講義草稿は、それだけですでに、読解の対象として十分な形式と内容とを備えている。しかしこれに加えて本書には、読者のさらなる理解の手がかりになるようにと、二つのテキストが付されている。一つは、「ニーチェ講義」。これは、一九七一年四月にモンリオールのマギル大学で行われた講演であり、草稿から消失してしまっているニーチェ関連のテキストを埋め合わせるためのものである。そしてもう一つは、「オイディプスの知」。やはりコレージュでの講義終了後に数回にわたってアメリカで行われたこの講演では、一九七一年三月十七日の講義においてなされた『オイディプス王』に関する分析が敷衍されている。これら二つのテ

クストはともに、「知への意志」講義の内容を見事に補ってくれるばかりでなく、それぞれ独立した個別のテキストとしても極めて興味深いものである。

ところで、この一九七〇—一九七一年度講義は、フーコーの新たな教育活動の始まりをしるしづけるものであるのみならず、それと同時に、彼の研究活動の一つの転機とされる時期を証言するものでもある。つまり、この講義は、彼が言説の考古学的分析に専心していた一九六〇年代と、権力の問題系が前面に押し出されるようになる一九七〇年代との境界において行われたものであるということだ。そして実際、「知への意志」をめぐる考察としてここに読むことのできるテキストは、この時期の彼の他の著作とともに、一種の蝶番的役割を果たしてくれているように思われる。そこで、「訳者解説」では、フーコーのこの初年度の講義が、それ以前の彼の仕事をどのように引き継ぎ、彼がそれ以後進む方向をどのように予告しているのかということをおおざっぱなやり方で示してみたい。「言説」と「権力」という彼の研究活動の二つの軸の接続をここに跡づけるべく試みてみよう。

言説と排除

まず、「言説」をめぐる考古学的研究が、コレージュでの講義においてどのように引き受け直されているのかということについて。

一九六〇年代の一連の著作において、狂気の歴史、医学の歴史、人間諸科学の歴史について考察した後、フーコーは、そうした探究のために使用した自らの方法を明確に示すべく、一九六九年に『知の考古学』を著す。この書物のなかで彼が第一に強調すること、それがまさしく、言説こそが自らの研究対象そのものであるということである。すなわち、言説の背後に隠されているものを見つけ出そうとしたり、言説の統一性を創造的主体に送り返そうとしたり、言説から出発して人間の思考や欲望を復元しようとする代わりに、考古学は、言説が従う諸規則、言説の種別性、言説の類型などを明らかにしようとするものであるということだ。伝統的な思想史研究が、言説の向こう側に想定される「思考のひそかな動き」を探ってきたのに対し、考古学的研究は、言説そのもののレヴェルを際立たせようとするのである。

そしてその翌年、コレージュ・ド・フランスにおいて講義を開始するにあたり、自らが以後携わるべきものとしてフーコーが示すのも、やはり、そうした「言説的出来事」ないし「言説実践」をめぐる探究である。一九七〇年十二月二日に行われた開講

講義（『言説の領界 *L'Ordre du discours*』と題されて単独で出版されており本書には収録されていない第一回講義）において、彼は、言説そのものの特異なレヴェルを扱うのが自分の研究であることを再度明言しつつ、そうした研究が今後どのようなものになるのかということ、そして初年度の講義では具体的にどのような問題が扱われるのかということ語っているのだ。

開講講義のなかでフーコーがまず提示するのは、いかなる社会においても言説の産出を管理するためのいくつかの手続きがある、という仮説である。つまり、言説とは、無統制の状態で自由に際限なく増殖するものではなく、社会における排除、制限、我有化の対象となるものであるということだ。まず、性や政治にかかわる禁忌、理性と狂気との分割、真と偽との分割などによって、ある種の言説を排除する手続き。次に、注釈の作業や作者の機能などにもとづいて、言説の産出を制限しようとする手続き。そして最後に、儀礼、教義、学説などに見いだされるような、語る主体による言説の我有化の手続き。こうした三つの手続きについて詳述しつつ、フーコーは、第一の手続き、そしてそのなかでもとくに真理への意志をめぐる排除の手続きが、当面のあいだコレージュにおいて研究すべき対象として扱われることになるであろうと告げる。

「真理の選択がいったいどのようにしてなされたのか、そしてまたその選択がいったいどのようにして反復され、継続させられ、位置をずらされたのか」という問いを掲げながら、彼は、古代ギリシアに標定される「真理の選択」の第一の契機についての検討を、この年の講義の任務として示す。かつてさまざまな効果や儀礼および危険を担うものであった言説が、プラトンおよびソクラテスの時代に「真なる言説と偽なる言説とのあいだの分割に合わせて秩序づけられたのはどのようにしてなのか」という問題が、ここに提起されるのである。

知への意志ないし真理への意志が、言説の排除の手続きに関与するものであるということ。そしてその手続きが、性に関して沈黙を課したり狂者から言葉を奪ったりする手続きと同様、恣意的なものであり、変更可能なものであり、制度的なものであり、暴力的なものであるということ。開講講義でも述べられていたこのことを、十二月九日にほとんどそのままのかたちでとり上げ直した上で、「知への意志」講義は、真理の価値を担うべき言説をめぐる起こった出来事に関して、歴史的分析を開始することになる。そうした出来事を標定するためにフーコーが向かうのは、すでに触れておいたとおり、アルカイック期ギリシアである。彼は、前七世紀から前五世紀にかけての司法実践の変化のなかに、真理の新たな形態の成立を見る。すなわち、神々のもと

にあって出来事として到来するとされていた真理、宣誓によって挑戦すべきものとされていたその真理に代わって、人々のあいだで確認される真理、正義と知に結びついた真理が、裁判の新たな方式とともに登場するということだ。ここから、ではどのような歴史的プロセスを経ることによってそうした移行が起こったのか、真理がそのように正義を可能にすべきもの、人々によって知られるべきものとなったのはどのようにしてなのか、という問いが提出されることになる。そしてそのとき、そうした歴史的変換を分析する際に、いまだ荒削りなやり方ではあるにせよ全面的に展開されるのが、権力関係をめぐる考察なのである。

真理と権力

言説の排除の手続きの一つとしての真理の選択をめぐる検討が、権力に関する問いを開くものであるということ。実を言えば、これもやはり、一九七〇年十二月の最初の二回の講義のなかですでに明示的なやり方で語られていたことである。「真なる言説を語ろうとする意志のなかで作用しているのは、欲望と権力以外の何ものでもない」と開講講義においてまず述べた後、フーコーは、十二月九日の講義のなかで、問題は「真理への意志のなかに、いかなる現実の闘いといかなる支配の関係が入り込んでいるのかを知ること」であり、「真理への意志という形態をとったこの知への意志を（…………）、支配の現実的システムに接続させること」であると明言しているのだ。真理への意志をめぐる研究は、したがって、そもそもの最初から、そうした意志を権力関係によって貫かれたものとして明るみに出そうという企てに他ならなかったのである。

そして、前七世紀から前五世紀にかけての裁判方式の変化に関する歴史的分析のなかで、実際に以下のことが示される。前七世紀から前五世紀にかけての農地の危機に伴う経済状況の悪化を背景として、貧しい農民たちが、自己防衛のために、正確な負債の測定や適正な返却時期の設定を求めるようになるということ。その農民たちと、一部の裕福な人々が、共通の利害のもとに結託することによって、ギリシア社会における力関係が再編成されるということ。そしてそれとともに、農民たちの要求を満たすために役立つ新たな形態の真理、公正さの確立のために人々によって知られるべき真理が、アジアの諸国家にそのモデルを見いだしつつ、それまで神々のもとに留め置かれていた真理に取って代わるということ。要するに、ギリシアにおいて新たな真理

を呼び求め、それを可能にしたのは、欲望、支配、正義をめぐる闘いであるということが、ここに明らかにされるのである。

そしてこれに加えてフーコーが指摘するのは、そうした新たな真理の形態をもたらすものとして現れる知が、ただちに権力とは無縁のものとして自らを示すということである。アジアにおいては支配のための道具とされていた知が、ギリシアにおいて借用される際、権力の領域から切り離されて、正義の領域へと移動させられるということだ。とはいえフーコーによれば、そうした知と権力との分断は見かけ上のものにすぎない。というのも、アテナイにおけるソロンの改革やコリントスにおけるキュペセロスの政策がどのようなものであったのかということの詳細に検討してみるならば、もっぱら権力や財産の正しき分配の基礎として役立っていたかのように見える知が、実際には、既存の政治的ないし経済的秩序の維持のために活用されていたという事実が明らかになるからだ。しかし、知と権力とのそうした偽りの分断は、それが偽りのものであるということを隠匿したまま、後の西洋の思考を大きく支配することになるとフーコーは言う。本書に収められた講演「オイディプスの知」において、ソポクレスの悲劇を一つのタイプの真理から別のタイプの真理への移行の物語として読み解きながら、彼は次のように語っている。「我々の思考システムにおいて、知を、権力の観点から、したがって過剰や侵犯の観点から思考することは、非常に困難である。

我々は、知を —— まさしく前五世紀と前四世紀のギリシア哲学以来 —— 正義、純粋な「無私無欲」、認識への純粋な情熱といった観点から思考している。」ギリシア以来、知と権力との虚構の断絶は、西洋においてその有効性を保ち続けてきたということ。政治的諸効果との関連で真理を思考することは、いまだ困難なままであるということだ。ところで、そうした困難に立ち向かいつつ、真理の価値を担う言説が権力のさまざまな制度やメカニズムとどのように結びついているのかを明らかにすること、これこそ、七〇年代以降のフーコーが自らに与えることになる任務そのものである。この一九七〇—一九七一年度の講義は、したがって、そうした任務の出発点を提示するものであるとみなされうるだろう。権力をめぐる闘いのなかで、権力の外に自らを保つと称する知が、その「恥ずべき起源」を隠蔽しつつ姿を現した契機を暴き出すことによって、本書は、彼の以後の権力分析が向かうべき方向をはっきりと指し示しているのである。

「虚構の場所」

このように標定された知と権力との見かけの分断に関して、最後にひと言だけ付け加えておきたい。そうした分断とともにギリシアに生じた出来事のうち、フーコーによって最も重要なものとして提示されているのが、ある一つの「虚構の場所」の「発明」である。すなわち、権力から一步退いて真理を語る者のための場所、支配力の実際の行使の外にとどまって正義を基礎づける者のための場所が、実際には歴史的かつ政治的な要請に従って出現したということだ。こうした記述が興味深いものと思われるのは、ここで「虚構の場所」として語られていることが、フーコーが後に「知識人」の役割について述べる際に、明確なやり方でとり上げ直されることになるからだ。

一九七六年六月の対談（「知識人の政治的機能」および「真理と権力」として『ミシェル・フーコー思考集成VI』に所収）のなかで、フーコーは、伝統的な知識人について次のように語る。知識人とは、長いあいだ、「真理と正義の大家」のことであり、「万人にとっての正しきことや真なること」のうちに身を置く者のことであった。そしてそうした知識人像は、特殊な歴史的象、すなわち、「正義の普遍性と理念的な法の公正さを、権力や専制や悪弊や富の横柄さに対置する者」という象から派生したのだ、と。十八世紀の啓蒙主義者がそのプロトタイプであるとされるそうした象、権力に対立するものとしての正義と真理を所有する者というその象のうちに認められるのは、まさしく、「知への意志」講義によってギリシアにその由来が標定された「虚構の場所」を占める者の姿そのものである。十九世紀から二十世紀にかけて知識人が果たそうとしてきたのは、権力の外から正しき者として真理を語るという役割、「ディカイオン・カイ・アレーテス」を言表するという役割に他ならないのだ。そうである以上、知と権力との接合およびその見かけの分断を見定めようとする者は、もはや、そうした役割を引き受けることなどできまい。「真理は権力の外にあるのでもなければ、権力なしにあるのでもない」ことを暴露する者には、自らが告発する「虚構の場所」に安らぐことなどもはや許されないのである。

そしてここから、ときに非難の対象ともされるフーコーのある種の沈黙を正当に評価することが可能となるだろう。「真実への気遣い」と題されたフランソワ・エヴァルトとの晩年の対談（『ミシェル・フーコー思考集成X』に所収）のなかで、彼は、知識人が今後果たすべき任務について次のように述べている。「知識人の役割は、他の人々に対して何をなすべきかを語ることはありません。いかなる権利があっても知識人はそんなことをしようというのでしょうか（……）知識人の仕事、それは、他の

人々の政治的な意志のかたちを定めることではありません。そうではなくて、それは、自分自身の領域において行う分析の数々によって、自明性や公準を問い直し、慣習および思考や行動の仕方に揺さぶりをかけ、一般に認められている馴染み深さを一掃し、規則や制度の重要性を測り直し、そして、こうした再問題化から出発しつつ、一つの政治的な意志の形成に参加することなのです（……）。」確かにフーコーは、権力関係の歴史的 분석を行い、それによってアクチュアルな問題を思考するための新たなやり方を提示しながらも、では何をなすべきなのか、何を欲すべきなのかと問う人々に対して、決して答を与えてはくれない。しかしもちろん、先ほど確認した彼の告発に対して耳を塞ぐのでない限り、そのことを憂えるには及ぶまい。実際、万人が進むべき正しき道を指し示す権利を持つのは、普遍的な真理と正義を権力関係の外から語るという役割を果たしうる者のみであろう。これに対し、そのような「虚構の場所」に身を置くことを徹底して拒む者、そうした役割そのものが政治的かつ歴史的に成立したものであることを暴き出そうとする者が、自らの言説を、万人にとって正しきことを語るもの、万人にとって処方価値を持ちうるものとして差し出すことなど、どうしてできようか。それに、何をなすべきかを人々に対して語ること、人々の政治的な意志を一定の方向へと導くこと、これはつまり、人々に法を課すことではあるまいか。そこにはすでに、嘲弄すべき何かがありはしまいか。

人々が自ら権力に従うのはどうしたわけだろうか。「知識人と権力」と題されたフーコーとの対談（『ミシェル・フーコー思考集成Ⅳ』に所収）において、ジル・ドゥルーズはこのような問いを提出していた。これに倣って、我々はフーコーとともに次のように問うことができるだろう。人々が自ら知に従うのはどうしたわけだろうか。人々はどうして、知に対してかくも大きな信頼を置くことができるのか。人々はどうして、真理を語ると称する者が、同時に、正義と自由を語ってくれるであろうと期待することができるのか。人々が、権力への服従を拒絶しながら、真理に服従しようと欲することができるのは、いったいどうしたわけだろうか。ただ単に、知と権力との分断および真理と正義との接続が、素朴に信じられているということであろうか。それとも、ここにもやはり、欲望ないし快楽と、利害関心、そして知らないし権力のあいだの、複雑な関係を見て取る必要があるのだろうか。

いずれにせよ、フーコーの言説のうちに行動の指針を探そうとしても、その不在を嘆いても無駄であろう。服従するための知を求める人々、聴従するための真理を求め人々に対して与えるべき言葉を、彼は持ち合わせていないのである。

*

本書の翻訳作業にあたっては、まず藤山が全体を日本語に訳し、次いで慎改がそこに修正を施すかたちで訳文を完成させた。フランス語原文の解釈から訳語の選択まで、最終的に決断を下したのは慎改であり、したがって、本訳書に関する全責任は慎改にある。

すでに触れておいたとおり、本書は講義そのものの記録ではなく、残された草稿を出発点として編集されたものである。このことを明示すべく、文体を、『講義集成』既刊で採用されている「ですます調」から、「である調」に変更した。

また、本文中に登場するギリシア語については、テキストの読みやすさへの配慮から、できる限りカタカナで表記した。初出の場合や挿入句の場合などには原語表記を付し、内容理解に必要と思われた際には〔 〕内に訳語を添えてある。なお、ギリシア語およびラテン語に関しては、『真理の勇氣』翻訳の際にもご協力いただいた明治学院大学元同僚の水落健治氏から、今回も多大なるご教示を賜ることになった。この場を借りて御礼申し上げたい。

そして最後に、筑摩書房編集部の岩川哲司氏には、藤山との今回の共同作業を快諾してくださったことに感謝するとともに、それにもかかわらずいつものごとく完成が遅くなってしまったことを、ここに深くお詫びしたい。

二〇一四年一月二十七日 慎改康之